

日銀の視点

弘道館、偕楽園、烈公御涼所（八幡宮付近）、青柳夜雨。生活圏には徳川斉昭公ゆかりの場所が多数あります。斉昭についてより深く知りたいと思ひ、永井博著「徳川斉昭」（山川出版社）を読み、斉昭が幕末の政治にその思想と行動力とで大きな影響を与えたことを再確認するとともに、多くの興味深いエピソードにも出会いました。

例えば、斉昭は藩士に示した「告志篇」で、「役人はも

日銀水戸事務所長 上野 淳

勇気持って変化に挑戦

っばら軽薄を旨とし、精勤しているようにみえても、ほんとうにその職に身を入れて勤めている者は多くはない」「少しばかり力を入れて仕損じるよりは、手を出さずに落ち度がないように（している）」

際には、120人を動員したものの鑄造は困難を極め、「失敗しても自分が責任を取る」と職人たちを鼓舞し、3回目にして成功しました。やり抜く覚悟と、強いリーダーシップがつかがわれます。一方で、

れてはならないと思います。さて、本書には「不確実な時代に生きて」との副題が付されています。外国船が来航して開国を迫る中、当時のリーダーたちは「攘夷か否か」という単純な2択では解決で

きない、難しく、

国の将来を大きく左右する決断を迫られ、苦悩

と指摘したそうです。前例踏襲で仕事をしたような気になっっていることを戒め、深く考えたうえで失敗を恐れずに挑戦していくことを求めているのでしよう。

大型大砲を設計、製造した

藩士に対して「朝夕食する所の米穀は、一粒一粒が民の辛苦であるので、食する毎にそのことを忘れず、一拝して箸を取ってもよいほどのことだ」とも述べていました。こうした感謝の気持ちは決して忘

しません。私たちが生きる今の時代も、少子高齢化、地球温暖化・脱炭素、感染症など、課題は異なりますが、将来を左右する決断を次々と迫られています。不確実性からくる不安・迷

いは決して消し去ることはできませんが、存続するためには、勇気を持って変化に挑戦していくことが、いつの時代にも、あらゆる組織で求められていると感じます。この点、県内の企業などでは環境が変化する中、自身の強みを生かして新分野に進出したり、新技術の活用により業務の効率化を図ったりするなど生き残り、さらに発展するために果敢に挑戦されている事例を多数見聞きます。不断の挑戦により、茨城県経済のポテンシャルがさらに開花していくことを、大いに期待しています。（次回は11月13日掲載）